

クリスマスの夜が明け、新しい朝の光の中で私たちは教会が祝うクリスマスの日中のミサに参加しています。この、朝の光の中で、あのベツレヘムの厩でマリアさまとヨセフさまが迎えたであろう、新しい朝の情景を思い浮かべながらこのミサをささげたいと思います。マリアさまとヨセフさまにとって、あのクリスマスの夜が明けて迎えた次の日の朝は、それまで経験したこのない全く新しい朝であったに違いありません。産まれた子を布に包んで飼い葉桶に横たえなければならなかったあの夜、マリアさまとヨセフさまはどのように過ごされたのでしょうか。夜が明けて差し込む朝の光の中で、あらためて、飼い葉桶の中のその子の顔に見いった時、マリアさまとヨセフさまの心はどのような喜びに包まれたことでしょうか。マリアさまとヨセフさまは直感的に悟っていたに違いありません。お二人心の底から突き上げ、全身を包むこの喜びは、産まれたその子が神のもとからもたらしてくれた喜びであることを。

マリアさまとヨセフさまを包むこの喜びは、私たちにも窺い知れないものではありません。人の子の親となった経験を持つ人は皆、あのクリスマスの夜が明けた朝の経験をしているはずで。

クリスマスの朝の光は、ベツレヘムの町に住む人々の上にも降り注ぎ始めていたことでしょうか。けれどもベツレヘムの人々が迎えたその朝の光は、私が迎える多くの朝のように、いつもと変わることはない朝の光です。そのいつもの朝の光の中で、クリスマスの今朝のミサで朗読された聖書は、マリアさまとヨセフさまを包んだに違いない、真の喜びの光へと私たちを招いています。「いのちは人間を照らす光であった。光は暗闇の中に輝いている」。クリスマスの夜、ベツレヘムに産まれた嬰兒が私たちにもたらしてくれたのは、このような光であるとヨハネ福音書は語っているのです。

あらためて、今、聴いたヨハネ福音書の初めから読み直してみると、次のように語られていました。「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。・・・ことばのうちにいのちがあった。いのちは人間を照らす光であった」。有名なヨハネ福音書の冒頭の一節です。マリアさまとヨセフさまを包んだ喜びに満ちた光は、お生まれになった嬰兒のいのちの光です。そして、そのいのちの光は、天使ガブリエルを通してマリアさまに告げられた神のことばがもたらしたいのちの光です。それはまた、ヨセフさまに夢の中で語られた神のことばがもたらしたいのちの光です。さらにそれは、このクリスマス、聖書を通して語られる神のことばを信じて、救い主の誕生を祝っている私

たちをも包んでいるいのちの光です。クリスマスを祝う私たちの喜びは、聖書が語るあの嬰兒がそのいのちをもって私たちにもたらしてくれた、いのちの光に包まれた喜びです。マリアさまとヨセフさま、そして、ここに集う私たちを包む、お生まれになられたイエス・キリストがもたらしてくださった、喜びに満ちたいのちの光の源は、ヨハネ福音書が告げているように、神のことばにあります。その神のことばは、天地創造のはじめに響いた「光あれ」という全てのいのちの創造主である神のことばです。天地創造のはじめに響いた「光あれ」という創造主である神のことばは、クリスマスの夜ベツレヘムの厩にお生まれになった嬰兒において肉となり、闇と混沌に覆われたこの世界に輝き出ているとヨハネ福音書は語っているのです。

クリスマスの夜、ベツレヘムの厩に肉となってこの世に来られた神のことばは、そこにお生まれになったことによって私たちに語りかけておられます。まだ一言も人間のことばを話すことの出来ない嬰兒のお姿をもって、私たちに語りかけておられます。そのようなお姿をもって私たちに語りかけておられる神のことばに耳を傾けることが、混沌とした闇の中にある私たちの世界にいのちの光をもたらすのです。私たちのこの世界の混沌とした闇は、私たち人間が口にする人間のことばによって一層混沌の度合いを増し、闇を深めています、そのことは、私たちが毎日のように耳にしている世界を駆け巡る情報や、私たち自身が口にして自分のことばを振り返ってみれば一目瞭然です。人のことばに信頼を置くことの出来ない、自分が口にする事ばに責任を持つことの出来ない世界は混沌とした闇に覆われた世界です。そしてそれは、私たちが生きるこの世界の姿です。虚しいことばだけが氾濫し、そのことによって一層混沌とした闇の度合いを深めているこの世界にあって、私たちは光を求めています。それによって生きることの出来る光を求めています。

このクリスマスの朝の光の中で私たちが耳にした福音のことばに誘われて、ベツレヘムの厩に私たちと同じ肉なるものとなってこの世界に宿られた神のことばに心を向けたいと思います。あらゆる人間のことばを鎮める沈黙の彼方から聞こえてくる神のことばに心の耳を傾けたいと思います。私たちがそのような心になれるとき、混沌とした闇の中に生きる私たちは、神のことばだけが持ついのちの光を受けて、いのちの光を放つ神の子らとなる事が出来ることでしょう。そのような恵み光を願って、私たちの光の源であるお方をお迎えしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高